会議報告

第9回核廃棄物等処理・処分に関する国際会議

*9th Biennial Int. Conf. on Nuclear and Hazardous
Waste Management(Spectrum 2002)*

共催 米国エネルギー省, 米国原子力学会核燃料サイクル・廃棄物処理部門
2002年8月4～8日(ネバダ州 Reno, 米国)

本会再処理・リサイクル部会幹事 天野 治

会議の概要

米国エネルギー省(DOE)および米国原子力学会(ANS)核燃料サイクル・廃棄物処理部門共催による標記会議が、ネバダ州リノにて開催された。

本会議の目的は、DOEの関係団体が、廃棄物処理・処分、除染、廃止措置(D&D)に関し、より良い方法について議論することであるが、実際には再処理関係の話題は少なく、廃棄物処理が主体であった。また、廃止措置の課題は、ここ1、2年で(極端にいうと今年に入ってから)、新技術開発から実際の除染(場所)、清浄化に移行しつつある。DOEの予算もR&Dから実プロセス作業に多く付いている。

今回の会議の参加者は約500名で、そのうち90%が米国からである。ほかに日本と英国から11名、ロシア、カナダ、アルゼンチン、フランスから5名など、約20カ国から参加があった。

会議のトピックス

ユッカ・マウンテンの状況については、使用済燃料の貯蔵(処分)が許可され、一番難しい問題に見通しが付いたと関係者は喜んでいる。まだ、地元の了解や燃料移送に検討課題が残っているが、サイト性能評価の段階から処分建設のための詳細設計の段階に移りつつある。

筆者は、本会再処理・リサイクル部会とANS核燃料サイクル・廃棄物処理部門との情報交換覚書き締結後(昨年11月)、同部門の部会へ対する多大な貢献に感謝すべく、同部門の依頼を受けて今回の会議に参加した。初日の「日本の再処理を取り巻く状況、およ

び再処理・リサイクル部会の活動の紹介」の発表、最終日の「国際的な今日の問題」のパネラーの1人として、キーノートスピーチや討論を行った。

米国でも若手を確保・育成することが急務になっており、筆者が紹介した「シニアと若手の対話」は新しい試みと

して、会場の興味をひいた。他の電源と比較しての原子力の経済性で、廃棄物処分、再処理などを入れるとどうかなどが討論された。「処分や再処理はまだデモンストレーションの段階であり、経済性はもう少し長い目で見ることがあるのではないか」との筆者の意

第1図 会場の様子

第2図 ユッカ・マウンテンの説明パネル

見に反論はなかった。

英国、スウェーデン、カナダから、それぞれ廃棄物処分場に関してキーノートスピーチがあった。スウェーデンの地層処分計画が少し早まりそうである。

今後の予定

会議終了後、米国アルゴンヌ国立研究所(ANL)にANS核燃料サイクル・廃棄物処理部門議長を訪れ、再処理・リサイクル部会と同部門のさらなる情報交換について意見交換を行った。その結果、本会「2003年春の年会」の前の3月24、25日に、第2回国際ワークショップを青森で開催することになった。そのテーマとしては、「アクチナイドリサイクルや原子炉をベースとした分離変換による放射性廃棄物への影

響—再処理が深地層処分容積を減らせるか」を取り上げることとした。核種ベースでの燃料サイクル、廃棄物までのシミュレーションを行い、その精度、問題点を議論するとともに、そのベースに立った具体的、かつ斬新的な提案を日本、米国、フランス、英国が行う計画である。今後、ワークショップを効果的に進めるための要綱を参加

国間で詰めていくことになった(年内に準備会合を行う予定。予見としては、米国は金属電解法のプロセスを一部変更するか、簡素化を図ってくる。フランスは軽水炉に適用するためのアイデアを出してくるのではないかな)。各国、現在検討中で、特許の問題もあり、まだオープンにはしていない。

(2002年9月19日 記)

著者紹介

あまの・おさむ(Osamu AMANO)

1977年東北大学大学院原子力工学修士課程修了。85～95年BWRプラント水質管理高度化(Fe/Ni比制御、ソフトシャットダウン等)による線量および廃棄物発生トップランナーへの挑戦。現在、東京電力(株)技術開発研究所原子力リサイクルGM。守備範囲は再処理、リサイクル、廃棄物処分。本会企画委員。

from Editors 編集委員会からのお知らせ

— ホームページ更新情報 —

<http://www.soc.nii.ac.jp/aesj/>

★学会誌、ホームページでご意見を募集しておりました誌上討論「プルサーマルと再処理問題を考える」への投稿全文を掲載中です。

平成14年度第3回編集幹事会より

- ・各機関から寄せられたNEWS記事について検討。原子力に関して肯定的なNEWSばかりでなく、新聞に掲載されているようなネガティブな記事も出していくということで進める。
- ・誌上討論「プルサーマルと再処理問題を考える」について投稿状況を確認。
- ・学会誌掲載記事のカテゴリーについて検討し、論文誌との兼ね合いで「私のメモから」欄の廃止を決めた。
- ・記事作成要領について検討。特集、解説など、それぞれのカテゴリーで執筆をお願いしたり、編集委員会で記事

をとりまとめる際のガイドラインを作成していく。

- ・NEWSは他の機関からのものも増やしたいとの意見があり、各機関の海外派遣者や、大学からも積極的に寄稿願うこととした。
- ・学会賞の推薦について、編集委員からの「論文賞」候補者の推薦について、あらためて依頼。
- ・学会誌モニターの選任について、会員の中から、無作為抽出でお願いする方法も考える。なるべく若い会員にもお願いしたい。
- ・論文投稿の電子化推進のため、WordやTeXのテンプレート作成を進める。具体的な記述例を増やすなどして、投稿規程を見直したい。
- ・英文論文誌の特集号を企画したいので、提案を募集する。
- ・企画委員会との申し合わせにより、専門委員会が終了した場合、2ページ以内で活動内容をまとめた報告を学会誌に掲載する。延長する場合も中間報告として掲載。

事務局編集担当 TEL 03-3508-1262 E-mail: office@aesj.or.jp